

◆2022年3月第2週の礼拝 説教

■日 時：2022年3月13日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「神様から与えられる試練の意味」

■聖 書：旧約 ヨブ記 1：20－22（p776）

■讃美歌：165「心をつくして」・206「七日の旅路」

お早うございます。

今日は、ヨブ記から、私たちに与えられた試練について考えてみたいと思います。

私達が直面する試練にどのような意味があるかです。

又なぜヨブ記を取り上げるのかです。

私がヨブ記から試練の意味を考えたいと思ったのは、ある時の友人の言葉が忘れられないからです。彼は、数年前、30年以上を共に生きた妻を御許に送りました。彼らが結婚したのは1970年代でしたが、夫婦別姓の道を選び、結婚式も挙げませんでした。彼より一つ年上の妻は私と同じ年で、生け花の先生をしていました。そして、回復が難しいと言われた病気に彼女が罹ると、私以上に多忙な日々を送っていた彼は、一切の仕事や社会的な運動を中断し、妻の介護の日々に入ります。病状も次第に進む中で、香港で生け花の展覧会が開かれます。毎年自分の作品を出展し、展覧会に参加していた彼女は、再び行くことを希望し、彼も又、医師からは責任が持てないと言われたにもかかわらず、妻の願いを実現すべく実行に移します。香港から帰国し、しばらくして、彼女は召されました。遺体は生前から2人で決めていた通りに大学病院に献体され、葬儀も行いませんでした。その彼が、ある時、妻の死について私に呟いたのが、司式者によって読んでいただいた御言葉でした。

「主は与え、主は奪う。

主の御名はほめたたえられよ。」

彼は、これまで一度として私に涙を見せたことはなく、悲しみの言葉を語ったこともありません。私には、彼は、「主が与え、主が取られる。主の御名はほむべきかな。」この御

言葉を一身に受け止めつつ、信仰の内に妻との別れを包み、胸に抱いているように思うのです。

もう一つの心に残っている話しです。

私が学生時代、日本バプテスト連盟が主催した全国青年大会に講師として訪れた小笠原亮一さんから知らされた話しです。

無教会の内村鑑三の弟子に、藤井武と言う人がいました。彼が、独立伝道者としての道を歩もうとするその時、彼にとって何物にも代えることの出来ない妻が召されます。その葬儀の席上、彼の師である内村鑑三は、悲嘆にくれる藤井武に次のように語るのです。「それでも、神は義しい」と。しかし、藤井は、その後何年も立ち上がれませんでした。

「それでも、神は義しい」。

この言葉は、先の「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」とも、私の母が5歳の娘を交通事故で亡くした時に慰めを見出した「主がお入り用なのです」との御言葉とも響き合います。

試練は突然やって来ます。

11年目を迎えた3・11、東日本大震災によって犠牲となった人々にしても、今のロシアのウクライナ侵攻によって生み出され続けている死傷者にしても、突如襲った恐るべき試練であったし、又あると思います。2001年のニューヨークのツインタワーを襲った9・11にしてもそうでした。そして、試練は、犠牲となった当事者だけの事柄ではありません。家族や深い関わりをもった友人など、その数は、犠牲者のはるか数倍にも及びます。

それでは、私たちに与えられる試練には、一体どのような意味があるのでしょうか。

試練に耐え、克服する道はあるのでしょうか。

試練に遭った時のヨブに戻ります。

巨万の富を築き、家族にも恵まれ、何一つ不自由なく暮らし、その名が世に知れ渡っていたヨブは、持っていた全ての物、即ち財産も、愛する子どもたちも、使用人も、飼っていた家畜も、一夜にして失いました。試練はそれに止まりません。自らの健康な身体すら重

い病いを負うのです。全財産を失い、健康さえ奪われた彼に、なお追い討ちをかけたのが、妻の言葉であり、友人たちの言葉でした。妻は、試練に遭っているヨブに対し、ヨブの神様に対する信仰を嘲ります。又、友人たちは、彼らの善意からであっても、言われなき悔い改めをヨブに迫ります。

この時、ヨブに訪れた試練を、他人事ではなく、自分の身に置き換えて考えてみたいと思います。

私達は皆、これまでの人生の中で、少なからず試練に遭って来ました。

私の場合ですが、最初に遭遇した試練は、以前にもお話ししたと思いますが、小学生の終わりから中学生にかけての数年間に経験した一家離散でした。それまで共に生活していた家族5人が別れ別れになり、父は一人の生活となり、高校生であった姉二人は見知らぬ篤志家の家に預けられ、母と私は親戚の家に引き取られました。家族が3つの場所に分かれての生活となります。

しかし、今思うに、この現実の中で一番辛かったのは、父と母であったと思います。

確かに、姉や私も大変だったと思いますが、自分が親となって思うことは、わが身を切られるようにして辛かったのは父であり、母であったと思います。

母は、まだ私が一緒でしたが、父は妻とも、子ども3人とも別れ別れになり、どれほどの寂しさであったかと思うのです。

しかし、振り返ると、私たち5人は、この時から、それぞれの場にあって、神様との真剣な関わりが始まったように思います。

保証人となったが故に負わされた莫大な借金の返済に苦しんだ父は、この時から、40年にわたって、一日も欠かさず、教会で行われていた朝の早天祈祷会に通い続けます。そこでの祈りは、家族のことは勿論ですが、手帳に書いてある教会員一人ひとりの事でした。大きな教会でしたから、教会員も多く、毎朝の祈りは1時間以上になりました。そして、それは、父が召されるまで40年もの間、続けました。

母の辛さは、父とは又違ったものがありました。それまでの豊かな生活からどん底にまで落ち、母一人の収入で子どもたちを養うことなど出来ず、姉二人を見知らぬ方の所に手放

さなければなりません。しかし、そうした中であっても、母の、子どもたちや周囲の人に対する優しさは変わることはありませんでした。

しかし、今述べた私の父と母の場合は、置かれた状況は厳しくとも、命は守られています。

しかし、命の危機に直面するか、命が失われた時、その試練は乗り越えることができるのかを思います。

今はまだ、そのような危機に直面していないと思っている私ですが、信仰者として、死に直面した時、最後に辿り着くのは、やはり、ヨブのこの言葉だと思うのです。

「主は与え、主は奪う。

主の御名はほめたたえられよ。」

ヨブのこの言葉から滲み出て来るのは、自分の命は自分のものではないと言う信仰告白です。命の相対化と言って良いと思います。

勿論生きているのは自分です。自分は、自分以外の者ではありません。

しかし、確かに生きているのは自分なのですが、ヨブのこの言葉から示されるのは、自分は、神様に生かされている。自分の命は神様の御手の内にあるということです。

先週の木曜日、牧師館から小高伝道所に送る荷物が、業者によって積み終わったのを見届けた後、夕方仙台に向かいました。その時間では小高まで行く列車はなく、仙台に一泊し、翌朝早く小高に向かうためです。前日の水曜日の荷造りも、木曜日の積み込みも、全て業者が行ったにもかかわらず、さすがに疲れ切っていました。

6年前、松戸から立川に越して来る際の疲れとは、比較になりませんでした。

確かに自分は年を重ねたことの実感を覚えました。

その時です。疲労困憊の中で、何か自分は神様の手の内にいるような思いに囚われました。被災地の教会への奉仕に、牧師としての最後の務めを覚える中で、確かに小高に向か

うのは私です。しかし、現実には、私と言う存在を御手の内に置き、御心のままに私を動かしている方がいることを思いました。

もし、その方の意でないなら、無事に荷物の移動が終わることなく、又、私の肉体も彼の地での働きに耐え得るものとはならないであろうことを思いました。

自分の外なる力、即ち自分がこうありたいと思う意思是消え去り、言わば、外なる力は疲れ果て、全くの無防備の状態ですべてを任せる、そのような思いの中で新幹線「はやぶさ」での1時間余を過ごしていました。

「主は与え、主は奪う。

主の御名はほめたたえられよ。」

とのヨブの言葉は、己に与えられた外なる力、即ち全ての物が取り去られた後、生きる力さえ失われた後に訪れた思い、自分の全ては御手の内にあるとのヨブの信仰の告白であると思います。

必死に生きること。それがどれほど大切なことであるかは、言うまでもありません。自分の前に立ち塞がるあらゆる困難や試練に立ち向かうことを避けてはならないと思います。そのための力を、聖霊の導きを祈り求めます。

そのことと、疲労困憊の末に、外なる力が消え失せ、自分の命をも含む一切が御手の内にあるとの思いが生まれることとは何ら矛盾するものではありません。

力を尽くすからこそ、力が去り行くのを知るのです。力を惜しんで生きるところには、力が去り行く思いは生まれません。

試練を克服する道があるとしたら、それは、力の限りに試練に立ち向かい、困難に立ち向かうことです。

しかし、それは、困難を乗り越えることではなく、試練は試練のままに、困難は困難のままにありつつ、力を出し尽くすことによって疲労困憊し、疲労困憊することによって外なる力が消え行き、すべてを御手に委ねる、神様に命を任せる時が与えられるのだと思います。

試練を乗り越えるのではなく、試練を神様に任せるのです。

朝海さんも引用しようとした「足跡」の詩で、足跡が一つであった時、それは、力を出し尽くした自分が、疲労困憊の中でイエス様におぶわれている、その事のように思いますし、そして、これほどの慰めはないのです。イエス様が私をおぶって人生を共に歩んで下さっている。

3・11で亡くなった2万の人々、今なお行方不明の数千の人々を思います。

ウクライナの地で砲撃を受けた病院、生きるに必要な薬すら無くして、死を待つ人々を思います。ある方からのメールに、「(ナチスが勢力を拡大し、第二次世界大戦へ突っ走る) 1930年代へ戻ったかのように眩暈を覚える」とありました。

私は、ウクライナの情勢に目を離すことは出来ない一方、このニュースの陰に隠れた感のある香港の民主化を願う人々、ミャンマーで国軍の弾圧に喘いでいる人々を思わずにはいられません。そして、神様は、一体どのような思いで、私たち人間の悪しき業を見つめているのかをも思うのです。

翻って私たちのこの日本を思います。

沖縄、そして福島です。今なお試練のただ中にある人々に対し、私たちは、力を尽くし。その後に待つ全てを委ねることの出来るその時まで、共に歩み続けることが出来ればと思います。

祈りましょう。